様式Ｃ－１９

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成２４年５月２０日現在

機関番号：１２６０１
研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2009～2011
課題番号：21520182
研究課題名（和文）　幕末・明治期における文学と図像の相互比較研究

研究課題名（英文）　Comparative Research on Literature and the Visual Image in Bakumatsu-Meiji Era Japan

研究代表者
ロバート キャンベル（Robert Campbell）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50210844

研究成果の概要（和文）：本研究では、天保期（1830-44）から明治時代前半にいたるまでに文学と視覚芸術がいかなる相互関係の中で進展し、文化領域を築き上げたかを具体的に検証し、評価することを目的とした。とくに幕末から明治１０年代にいたる同時代の人物を描いた肖像画と、それらに対する知識人・政治運動家たちの思考と利用状況に焦点を絞って調査。次の領域に沿って、俯瞰できる形で整理し、分析をした。①肖像と漢詩文の相互関係②獄中志士と肖像③「美人図」に寄せる賛詩賛文。

研究成果の概要（英文）：The present research aims to investigate and evaluate how the fields of literary and visual arts in later early modern and modern (Meiji era) Japan came to influence each other, eventually forming a coherent sphere of cultural activity. Especially close attention was paid to portraits painted or printed between the *bakumatsu* and second decade of the Meiji era, and how these reflected or influenced the thinking of contemporary intellectuals and political activists. Research was focused on the following three problems: 1. The intertextuality of portraits and *kanshibun* (sinological prose and poetry). 2. Portraits of and by *bakumatsu* era activists. 3. *Kanshibun* inscribed on images and portraits of beautiful women.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2009 年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010 年度	900,000	270,000	1,170,000
2011 年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総　計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：人文学
科研費の分科・細目：文学・日本文学
キーワード：日本文学、日本美術、幕末、維新期、肖像、漢文学、絵画、古写真

１．研究開始当初の背景
(1)文学研究に関しては、化政期から幕末に顕著とされる雅文芸の社会的な拡充と普及と、その普及にともなって文学者が自らの「情」を述べることが強く求められていたことが背景として挙げられる。
(2)視覚文かに関しては、当時の文学者は当世の「現実」を捉え、伝播する強力な方法として画像に着目した、ということが考えられる。

２．研究の目的
幕末から明治初期において同時代人物として描かれた肖像画の数々と、それらに対して寄せられた被写体、依頼主、所蔵者、鑑賞者などの証言を収集し分析することによって、幕末・明治時代における未検討の文化領域を

考察し、位置づけることを目的とした。

３．研究の方法
（１）肖像と漢詩文から時代を捉えるために、多くの肖像と、肖像をめぐる言説を収集し分析した。とくに儒者の肖像に絞って、模倣と同時代性について考察した。
（２）吉田松陰など投獄経験を持つ活動家（いわゆる志士）たちの肖像と詩文を収集し、分析した。
（３）「美人図」と、それらに寄せられた賛詩賛文を収集し、分析した。渡辺崋山《芸妓図》をはじめ、肖像と詩文のジャンル交流を考察し、かつ明治初期の肖像写真と文学に及んだ。

４．研究成果
19 世紀当時の絵画をはじめとする図像と文字によって形成されるテクストとが緊密に導き合いながら、社会へ浸透していく射程を明らかにすることができた。昨年１１月に英国・セインズベリー研究所より招聘され、大英博物館をはじめ 3 箇所で本研究のテーマに沿って連続講演会を行う機会を得た。これから本研究の成果を単行本として書き上げる一方、同研究所の協力を得ながら、英語版としてまとめて公刊する所存である。

近世後期日本文化の大きな特徴として、文化的であろうとする人口が地域的にも階層的にも大きく広がることが挙げられる。本職を守りながら、日々の中に詩を置き、時間をかけ、詩のエッセンスを味わって心情を涵養することが理想的な生き方として注目されるようになる。生活に直結しないからこそゆとりが生まれ、詩を通して、世間との折り合いを学ぶ契機として捉えられている。「人にして情なきは木石に同じ」、というように余裕がないまま生き続けなければならない人の人生を「愈々無情の窟に堕るものなり」といい、情も知らない、ただたんに筋みち正しく利害に忠実に生きると逆に批判されるのであった。したがって「無情の人は必ず詩を作ること能わず、作りても詩にならず」、というように、作詩と自己規定がつよく結び付けられるのもこの時代である（広瀬淡窓〈一七八二～一八五六〉『淡窓詩話』）。詩は単なる様式であってはならず、作ることで心を豊に育てることを目標に、作詩の意味は広く社会に認められていった。このように封建制度は、日々の利害と、精神的な余裕との間に一種のバランス感覚を日本人に与え、研ぎ澄まさせていったということが本研究の調査を通して見えてきた。

文化的であろうとする者は情を知れ、情は掘り下げて自己を表現できるようにせよ、ということは近代以前に生きた日本人の思考の根本にあった。

学ぶごとについて段階があり、外来種の詩型であった漢詩は、ルールが明瞭で初学への学習書も豊富に揃っていた。行動として詩をどう学び、どう語っていたかを考察することで、近世日本独自と考えられる「情」の具体相を解明することができるのである。

日本漢詩の持つもう一つの特徴は、詩作と批評両面において、周囲との間で知識が往き来し、感覚が磨き立てられる過程の中にこそ、作品が成り立つということである。詩に詠まれる内容には典故（中国の古典表現やエピソード等）が縦に走り、一方では当時の師匠・知人等から受けた批評に基づいてリアルな推敲が横へと広がっていく。詩文は筆をとって字書（韻書）を片手に自分で作るものであると同時に、長年、古今の詩句を読み解き、鑑賞することなくしては作成できないので、読み、諳んじるプロセスを大切にする。日本の詩人は書斎に閉塞することなく、遊学と継続的な交流を通して作詩に臨んだのである。

近世後期から明治初期の漢詩人は、都市部にのみ存在したわけではない。たとえば一九世紀初頭、讃岐（現在の香川県）に住みながら、同時代の新作詩集を大坂などから取り寄せてはノートに書き出し、定期的に友人を集めて朗読し、詩社としての絆を徐々につくり上げることに成功した人たちもいた。

「余〔私〕、近人の詩を聞くことを楽しむ。聞いて快意の者〔趣味に合った詩〕に遇へば、便録して以て吾が友に示す。吾が友、之を読んで亦楽しむ。吾が友、素より二人　有り。或いは花時、或いは月夕、或いは凄風、或いは苦雨、未だ曽て一日も相往来せざるはなし。往来するも、又未だ曽て一日として同じく読み、同じく評して、同じく楽まざるはなし。三人は之を以て声色〔音楽や女遊び〕に換ふる者、十年一日の如し……（棲碧山人編『近人小稿』自序、文化十五〔一八一八〕年刊）。

「当今世間の楽、我が三人より楽しきは莫し」と序文が結ばれるように、当時の知識層にとって漢詩とは共有し合う行為であり、生活に深く根付いていたのである。

「詩は実際を貴ぶ事、今人皆知れり」、とは広瀬淡窓が同時代に書いた『淡窓詩話』の一節である。続いて次のように、詩人による「実際」への誤ったアプローチを警戒する。

但し今人好んで些細鄙猥の事を叙べて、之を実際と思えり。予〔私〕が所謂実際とは然

らず。たゞ人々の実境実情を叙べて、矯飾なき所を指すなり。然るに今の人、丁壮の歳〔壮年〕に在りて、好んで衰老の態を写し、宦途〔官途〕に在りて、専ら山林の景を写す。目の触るゝにも非ず、情の感ずるにも非ず、唯古人の語を模倣するのみ。如此ならば、仮令其情景見るが如くに写したりとも、優人〔役者〕の仮装を為すが如し。豈実際と謂うべけんや。（『淡窓詩話』下巻）

自分の生き様に忠実に作詩することを奨励するために、見ない山を描き、取りもしない年を感傷こめてかこったりすることを否定している。一九世紀前半の指導的漢詩人が大かた、同じようなことを周囲に対して訴えていたことが浮かび上がってきた。江戸在住の儒者・松崎慊堂もその一人である。

廟堂〔政治の中枢〕にして窮士〔貧乏人〕の語をなし、安居して〔家にこもって〕羈旅〔旅〕の語をなすは、身分を留めず、また我の在るものなし。みな詩に非ざるなり。何とならば、詩は情にもとづけばなり……（松崎慊堂『慊堂日暦』「作詩」、文政七年〔一八二四〕五月一五日条）。

情は人ぞれぞれの性情にもとづくもので、理屈ではなく、経験に裏打ちされていなければならない。慊堂は上記の項目を、「（詩において））必ず我の在るありて、而る後に真詩となす」と結んでいる。

一方、真の詩を求めた彼らは、目で見て直に感じることができるリアルで豊潤な人間の経験を、同じ江戸時代に生きる思想家と詩人の風貌　ー　顔、仕草、装束にいたるまでの外見　ー　から探りはじめたのもこの時代であった。

たとえば、渡辺崋山が若い自分から尊敬し信用した幕府昌平坂学問所儒官・佐藤一斎の肖像画である（文政四〔一八二一〕年制作、東京国立博物館蔵）。武家で学者詩人でもあった崋山が、西洋絵画の技法を取り入れて写実的に仕上げた初期の一枚である。崋山は後に、右に引いた「作詩」の松崎慊堂をはじめ、何人もの同時代人物の肖像を手がけているが、この絵の被写体である一斎は三年後（「作詩」の執筆からちょうど一ヶ月後）、自分の絵姿に対して、漢文で自賛を寄せている。冒頭を読んでみると、「一毫も我に似るあらば之を我と謂いて可なり、一毫も我に似ざるあらば、之を我に非ずと謂いて可なり」、と述べている。ほんの少し私に似ているところがあれば、それは私だ、といえるし、どこも似ていないといえば、それは私ではないと言えるだろうし、ということである。

似るか似ないかはしょせん「貌」の問題である、と続く。それより作品の真価を決めるのは、一箇の人間として精神が生き生きと絵の表面から現れているかどうかである、という。一斎はここで、対峙した一枚の絵絹からほとばしる「神」の気配に気づき、すなおに感動している。宇宙の万物に通じる神気さえ感じ取れれば、たとえば外見が全く似ていないとしても、その絵は「亦尽（ことごと）く我なるなり。而るを況して其の似る者、誰か我が真に非ずと謂わんや」と、最終的に崋山の腕と洞察力を称賛するのである。

『海国兵談』を書いた憂国の思想家・林子平（仙台藩士、一七三八～九三）の肖像を、安政四（一八五七）年二四歳にして、昌平坂学問所書生寮に暮らしていた同じ仙台の岡鹿門が所蔵していた。子平は、幕末の書生の間では言わずと知れたヒーローである。しかもこの一枚は、子平の家に伝わるものを写し取ったたという由緒があり、書生寮の青年にとっては宝物である。子平の姿は旅装束で岩に腰かけ、左手には矢立、右手には筆を握って膝の上に何かしら見聞らしきことを白紙に書き付けている。

この年の一〇月に、鹿門は寮友の松林飯山の居室に絵を持ってゆき、鑑賞の記録を書かせた。二一歳の飯山が記した「林子平画像記」（『飯山文存』巻二）がその記録に当たる。読んでみると筆者が風姿の迫真性におどろきながら（「摸写入神、鬚眉皆生動」）、またそれ以上に体の微細な特徴までが子平の胸中、つまり志と響き合う形で肖像が仕上がっていることに言及している。子平は実践的な学風を好み、諸国を行脚した。「故に其の旅装を画くは、其の志を見（あらわ）すなり。特（とくに）其の皮肉の豊腴たる、憂有る者に類（に）ず。豈其れ胸中、愧ずるところ無き故に然るか」、と飯山は続く。描かれた姿に心のリアリティーを探り当てようという姿勢で鑑賞記録を執筆している。

鹿門が所持した肖像画の存否を確認することはできないが、寮友飯山の文章に立ち現れるのとほぼ同じ姿を、複数の漢文作品に見出すことができた。同時代の画師が写し、書生の間を往き来し、そして今日に伝わる例もある。一例は、鹿門たちの先輩で仙台藩士であった大槻磐渓が持っていたもので、やはり「同藩」の士として賛文を寄せている（早稲田大学図書館所蔵）。頑丈な筋骨に頬のやつれが似合って「憂い有る」姿、眼光が鋭い。列島の辺防に賭ける子平のゆるぎない思い、決意の気配を感じさせるポートレートである。

一方調査の過程で、吉田松陰が最晩年に書き、没後に弟子たちが出版させた一冊の本を見いだした。『照顔録 附坐獄日録』と題して、安政六（一八五九）年一〇月、松陰が江戸で処刑される数ヶ月前に萩の野山の獄舎で執筆した随筆が二編入っている。刊年は記されていないが、松下村塾の塾生が準備し印刷させたのが慶応元（一八六五）年のことで、当地で出回って「大流行」し、また翌年六月に始まる第二次幕長戦争の最中にも積極的に配られ、読まれていたことが確認できた。

この一冊は、執筆から出版、そして読書環境にいたるまでがレジスタンスに彩られ、実戦のさなかで読まれたかと思うと、末期とはいえ、江戸文学作品の中でも特異な書籍と言える。いわゆる田舎版なので刷りも造本も粗雑である。その素朴なたたずまいは逆に、当時の日本列島に充満した気風を如実に伝え、思想と図像との相関を考えるうえでは恰好の資料といえる。

巻頭にある「照顔録」とは、松陰が獄中に読破したおびただしい数の中国古典から抜き書きしたもので、「一両句の耿々として顔を離れざるもの」だけを残された時間に書き出していった。タイトルにある「照顔」とは、南宋末にモンゴル軍が中国に攻め入った際に抗戦して殺された名相・文天祥の獄中作「正気歌」を念頭に命名している。すなわち終句「風檐〔風が吹き通る軒端〕　書を展いて読めば、古道　顔色を照す」を借用している。「正気歌」は、松陰ひとりに限らず、当時の活動家がこぞって口ずさみ、当然「国歌」不在の当時に地方志士を勇気づけるものがあった。たとえば、松陰より二十日ばかり先に同じ獄舎で処刑が執行された福井藩士の橋本左内も、

天祥の大節　胸に心折す
土室（牢屋）　猶お吟ず　正気の歌

とこの歌を朗吟する姿で「獄中作」の一首を閉じている（『殉難前草』所収、慶応四年。但し『藜園遺草』〔明治四年〕では「胸（に）」を「嘗」と改訂）。

このように憂国の士は、英雄の歌を声に出してレジスタンスを誓ったのだが、同時に英雄の風貌を偲び、肖像に託して詩文を作るという経験も共有していた。

同じ安政六年頃に筆写された昌平坂学問所書生寮の詩文集をひもとくと、「文々山（天祥のこと）の肖像に題す」という短い習作が一箇入っている（作者未詳、『昌平黌詩文互評』所収、自筆稿本一冊、研究代表者所蔵）。書生寮の中に文天祥の図像を掲げて寮生に見せ、その姿からそれぞれが感じたことを簡潔に小品として書き上げるという設定で出来上がった作品である。正確に言うと、その図像が実際寮中にあったのかどうか、それとも各自が天祥の顔を想像しながら執筆にかかったのかは、定かではない。当時、漢学塾では絵に寄せて詩と文を作ることはたいへん流行しており、毎月、宿題の中に取り入れるほどの人気があったので、学習の現場に絵画や版画など視覚媒体が存在しなくても、「バーチャル」な練習として肖像に文を充てることは充分考えられたのである。「文々山の肖像に題す」も、「私会」という集いで書かれていた。私会とは、学問所の書生たちが定期的に寮の食堂に集まって、作文の自主トレーニングを行なう場所であった。日が暮れて先生もいない、気楽な寄り合いである。食堂は次のような光景になっていた。

…飯器の蓋に雑菓を盛り、会幹の撰題五六箇あるを伝観、茶話少時、舎に就き、当夜は発声朗読を禁ず。三更（零時前後）に至れば、衆を会堂に集め、詩文掛朗読一次、その語を成さざるの詩文は、詩文掛も当惑、本人、顔土の如し…（岡鹿門『在臆話記』第一集）

寮生は世話人（会幹）が出してきた課題を見ながら、買い込んだ菓子類を前にして、しばし雑談する。しばらくするとそれぞれの居室に戻って、課せられた宿題を書き上げていく。夜中にふたたび食堂に結集する。自作を記した紙を詩文指導担当の寮生（詩文掛）に手渡して、順番に朗読してもらいながら、訂正の指摘を受けていく。

「文々山の肖像に題す」という文章を見ると、タイトルの横に小さく「会幹多務、練磨に暇あらず、唯だ責を塞ぐのみ。請う、恕（ゆる）せよ」と多忙ゆえの口実を認めている。本文の周りには、仲間七人による添削案がびっしりと書き込まれている。内容は、逆境の忠臣天祥を支えたものが「浩然の気」（『孟子』による）であり、肖像からそれが横溢している、という主旨である。一編は次のように始まっている。

文丞相（天祥）没するや、其の妻欧陽氏は其の屍を収む。面、生きるが如し。今其の像を見るも亦た生きるが如し。覚えず潸然（涙が流れ落ちるさま）たり。嗚呼、公は不幸にして衰世に生まれ…

松陰の『照顔録』に話を戻すと、巻頭には著者の肖像画とそれに寄せた自筆板下による賛詩と賛文が載っている。晩年の松陰も、文字本文と同等に「風貌」も強い喚起力を持

ち、人々を突き動かす力のあることを充分知覚していた。没後に、師としての風貌がどのように回顧されるかを、意識し行動していたと言える。

萩から江戸伝馬町の牢獄に移送される直前、松陰はいよいよ生きては帰れないという覚悟を決め、家族と門人との間に別れの手紙や詩文を頻繁に送り合っていた。他家に嫁いだ妹が三人おり、彼女らに手紙で「夫を軽く思ふ事当時の悪風なり。又奢りが甚だ悪い事、家が貧に成るのみならず、子供のそだちまで悪しく成るなり。心学本間合々々に読んで見るべし」というように、家のこと、姉妹が読むべき本の種類までを指示してみせる（五月一四日付）。門人に対しては、師匠がいなくなる前に肖像を描かせ、自筆の賛を書き付けてもらおうという算段をつけ、松浦松洞（松浦亀太郎、無窮とも）という画家で門人がいるので獄舎に出向かせ、肖像を描かせたのであった。移送を命じる一報が江戸から萩に着く二日後の五月一六日に、松陰はその日記に「朝、肖像の自賛を作る。像は松洞の写す所、之れに賛するは士毅〔妹婿で門人の小田村伊之助〕の言に従ふなり」、と賛詩を記したことを認めている。翌日、この図賛にさらに跋文を書き加えるのだが、それによると

…嗚呼、吾れ去る。諸友此れに対せば、宜しく隔世の想を為すべし。吾れ即し市に磔せらるとも、此の幅乃ち生色あらん。

松陰は文天祥にあやかり、「面、生きるが如」き後世のアイコンを残すことに自覚的であり、その自覚と行動から当時の知識層が志向した表現様式の一端を見いだすことができる。つまり図像と文字本文とが緊密に連繋し合い、社会へ浸透していく射程を明らかにすることで、本研究では一定の成果を上げたと言えるのである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔図書〕（計３件）
ロバート キャンベル、東京大学出版会、J ブンガク　―　英語で出会い、日本語を味わう名作 50　―、2010、242

ロバート キャンベル、ディスカヴァー・トゥエンティワン、J ブンガク、2011、228

ロバート キャンベル、NHK 出版、ロバート キャンベルの小説家神髄、2012、192

６．研究組織
(1)研究代表者
ロバート キャンベル（Robert Campbell）
東京大学・大学院総合文化研究科・教授
研究者番号：50210844

(2)研究分担者
（　　）

研究者番号：

(3)連携研究者
（　　）

研究者番号：